外国語教育評価学会(JLTA)

第1回全国研究大会(1997年度)資料・プログラム

The First National Conference
Of
The Japan Language Testing Association

大会テーマ:「言語教育と測定・評価」

日時:　11月8日(土) 9:00－19:00
会場:　東京経済大学 (6号館)
(〒185 国分寺市南町1－7－34)

外　国　語　教　育　評　価　学　会
The Japan Language Testing Association (JLTA)
〒235 横浜市磯子区洋光台 6-29-6
TEL.& FAX.045-833-5610

全国研究大会運営委員

大友賢二　Thrasher, Randy　石川祥一　中村優治

大会準備協力者

安間一雄

第 1 回 大 会 プ ロ グ ラ ム

8:30～　　**受 付**（6号館1階）

9:00～11:30　**PC ワークショップ**（事前申込制）

1　「インターネットによる文献検索と資料収集法」（5階F504）
　上村 隆一（福岡工業大学）

2　「テストデータの分析法」（5階F505）
　大友 賢二（常磐大学）　**中村 洋一**（長野県篠ノ井高校）

11:30～12:30　**昼 食**（葵陵会館食堂）

12:30～12:40　**開会の挨拶**（7階中会議室 3）　総合司会 **中村 優治**（東京経済大学）
　会長　**大友 賢二**（常磐大学）

12:40～13:50　**基調講演**（7階中会議室 3）
　紹介　**大友 賢二**（会長・常磐大学）
「英語教育と評価—外国語能力に迫る—」
　講師　**岡 秀夫**（東京大学）

14:00～15:30　**研究発表**（発表 20 分，質疑 10 分）

第1室（7階中会議室 1）　司会 **清川 英男**（和洋女子大学）

① 「内容重視のテスト形式」　**杉野 俊子**（防衛大学校）

② 「ALT の authentic English 使用に関するアンケート調査」
　中村 洋一（長野県篠ノ井高校）

③ Comparison of Attractiveness in Multiple-choice and Dichotomous Judgement Items　**安間 一雄**（玉川大学）

第2室（7階中会議室 2）　司会 **清水 裕子**（近畿大学）

① 「英語聴解力テストにおける項目分析」　**土平 泰子**（信州豊南女子短期大学）

② 「オーラル・コミュニケーション能力を重視したリスニングテスト：問題出題条件がテスト成績に及ぼす影響」**木下 正義**（福岡女子短期大学）**石井 和仁**（福岡大学）
　大津 敦史（福岡大学）　**川尻 徳**（宮竹中学校）　**島谷 浩**（九州共立大学）
　高梨 芳郎（福岡教育大学）　**Laskowski, Terry**（熊本大学）

③ Does Prepping for a Standardized Test Help? **Robb, Thomas**（京都産業大学）
　Ercanbrack, Jay（京都産業大学）　**Ross, Steven**（関西学院大学）

15:40～16:50　**基調講演**（7階中会議室 3）

紹介 **大友 賢二**（会長・常磐大学）

「テストとコンピューターテスト方法の技術革新—」

講師　**池田 央**（立教大学）

16:50～17:10　**懇談会**（7階中会議室 3）　**石川 祥一**（防衛大学校）

閉会の挨拶　**Thrasher, Randy**（国際基督教大学）

17:10～19:00　**懇親会**（7階中会議室 2）　司会　**小山由紀江**（長岡技術科学大学）

発 表 要 旨 (ABSTRACTS)

基調講演

「英語教育と評価—外国語能力に迫る」

岡 秀夫 (東京大学)

0. はじめに

1. 外国語教育における評価の歴史

(1) 伝統的な評価：翻訳と文法・語彙

(2) 構造言語学

(3) 統合的アプローチ

(4) 現在は？

2. (A) 実際のテスト

(1) 入試 (2) 英検 (3) TOEFL (4) CELT (5) TOEIC

(B) 現実的な問題

(1) 作問=Note-taking

(2) 採点:Why did Naoto go to the States？

3. (A) "Communicative competence" は必要十分か？

"functional literacy" (機能的識字)

表1 (LIT 東大大学院言語情報科学 2, 1995)

図1 (『言語』大修館 1996, 2月号)

(B) 英語教育はバイリンガルが目標か？

バイリンガルに関する2つの誤解

図2 F. Grosjean (1992)

図3 (『東大英語教育学研究会紀要』1, 1997)

「テストとコンピューター—テスト方法の技術革新—」

池田 央 (立教大学)

最近、とくにアメリカではコンピュータを用いたテスティング(Computer-Based Testing, CBT)が急速に実用化に向かって突き進んでいる。そこでは従来のペーパーテストでは考えられない新しい概念や方法論を取り入れた試みがなされている。例えば項目応答理論(IRT)の応用や適応型テスト(CAT)の開発、Multiple-Choice Question(MCQ)に代わって Drag-and-Drop Question(DDQ)の採用、Keyboard 解答による Construct-response Items、マルチメディア対応の問題形式やシミュレーション・テスト、Multi-Sites Multi-Day Approach など、いわゆるパフォーマンス重視のテスト観を社会的背景として、ペーパーテストによらない全く新しいタイプのテストが出現しようとしている。ここではそうした最近のアメリカの実状を実際に見聞し得た情報などをもとにお話したい。

PC ワークショップ

「インターネットによる文献検索と資料収集法」

上村　隆一　(福岡工業大学)

近年、急速に普及してきたインターネット上のWWWサービスを利用して、言語学関連の文献および言語資料(主としてテキストデータ)を検索・収集する方法を紹介する。まず、国内外の研究教育機関および学会等諸団体のウェブ・サイト(WWWサーバの所在地)のうち、言語学関連ホームページの内容が最も充実しているもの (oxford.ac.uk, indiana.edu, tohoku-u.ac.jp, その他)をいくつか取り上げ、実演によって、その利用方法を具体的に説明する。次に、Yahoo, InfoSeek, Alta Vista など主要なWWW検索サービス(サーチエンジン)を用いて、研究者自身が有用な言語学関係のホームページを検索するためのガイダンスを行い、実際に参加者各自に体験実習していただく。さらに、時間が許せば、最新の大規模英語コーパスとして注目される British National Corpus (BNC) のホームページ上で試験的に開始された BNC Online の検索サービス、テキストデータベースの国際標準化プロジェクトとして知られる TEI(Text Encoding Initiative) と TEI が文書論理構造記述用の言語として採用した SGML(Standard Generalized Markup Language)についても適宜紹介したい。なお、受講に際しては、Windows 95 の基本操作とインターネット利用(特に WWW, FTP)についての基礎知識を有することが前提となる。

「テストデータの分析法」

大友　賢二　(常磐大学)　　中村　洋一　(長野県篠ノ井高校)

『項目応答理論入門』(大友賢二著, 大修館, 1996)をテキストとして使用し, 同書に添付されている Test Data Analysis Program: TDAP を用いて, テスト・データの基本的な分析法についての実習を行う。事前に同書を購入して読んでおくことが望ましいが, 同書なしでも受講できる。実習する分析法は, 大きく分けて2つ, 1)現在, 一般に広く用いられている「古典的テスト理論」, 2)「項目応答理論」を基盤としたものである。古典的テスト理論によるデータ処理では, 1)データの入力, 2)基礎統計, 3)標準得点, 4)項目分析, 5)信頼性係数等を取り扱う。また, 項目応答理論による分析では, 単純で容易な1-Parameter logistic model (別名:Rasch model)を取り上げる。しかも, その中でも最も簡単な PROX を用いて, 1)項目困難度パラメータの推定, 2)受験者能力パラメータの推定, 3)モデルとの適合度の検討, 4)項目特性曲線・テスト特性曲線の作成, 5)項目情報関数・テスト情報関数の作成等を取り扱う。

研究発表（第１室）

「内容重視のテスト形式—Content-based Testing」

杉野俊子（防衛大学校）

大学の英語教育において、四つのスキル（読む、書く、聴く、話す）を伸ばしていくというのが、最近の傾向である。そのために、オーディオ機器を用いたり内容重視の授業（content－based instruction）等を行い学生の英語運用能力を高める工夫をしている。そのような方法、工夫は英語や語学教育学会では多数発表されてきている。しかし、それらが必ずしも定期試験やその評価につながっていないようである。他の先生方が作られた試験問題は公表されているわけではないので、あくまでも推測や生徒からの情報によるものではあるが、日本語訳を含めた受験問題のようなテストや、すべて日本語によるレポート等もあるようだ。

この発表ではまず、二つの内容重視の授業（文法と作文、フレッシュマン・イングリッシュ）の進め方を紹介し、その後その授業内容が反映するようなテスト形式と評価について紹介したい。例えば、対話形式のはじめの部分は指定してあるが、終わりは自分の想像力を使って対話を終えるようにする問題とか、物語の始まりは書いてあるが、happy ending, sad ending, strange ending の指示に沿って自分で物語を完結する問題等である。学生の答案も紹介したい。

評価方法や採点時間等問題は残るが、授業内容を反映し、尚且つ学生や先生が楽しんで受けたり採点したりすることが出来る試験方法と評価の仕方をこの学会で発表することにより他の先生方の参考になれば幸いである。

「ALT の authentic English 使用に関するアンケート調査」

中村洋一　（長野県篠ノ井高等学校）

I. 調査の目的

本調査の目的は、Assistant Language Teacher ; ALT を対象に、高等学校の英語授業で、1. Authentic English をどの程度使用しているか、2. Authentic English を使った場合に生徒がどのような困難を感じると考えているか、3. Authentic English を使って生徒とのコミュニケーションがうまく行かない時にどのようなストラテジーを使用するか、などについてアンケート調査を行い、その結果を検討して、「英語によるコミュニケーション能力」を養成する授業、及びその測定と評価における課題を考察することである。

II. 方法

1997 年 6 月末から 7 月初旬にかけて、長野県内の高等学校に勤務する ALT 48 名に、郵送により、アンケート調査を依頼し、20 名から回答を回収した。回答者 20 名の内訳は、男性 8 名・女性 12 名、年齢は 23 才から 35 才、出身国は U.S.A. 7 名・U.K. 5 名・Canada 4 名・New Zealand 3 名・Australia 1 名であった。また、長野県での ALT 経験年数は、1 年未満 10 名、1 年以上 2 年未満 7 名、2 年以上 3 年未満 3 名であった。アンケートでは、" authentic English" を" the same English you speak back in your native town" と定義した。

III. 結果

1. Authentic English を英語の授業でどの程度使用しているか

   Always－1 名、Often－0 名、Sometimes－7 名、Rarely－9 名、Never－3 名

2. Authentic English を使った場合に生徒はどのような困難を感じると考えているか

   生徒の語彙は少なく、領域が限られており、理解できない語が多い/「実際に使用される文法」はより複雑、多様で、理解できない/ 速いスピードについていけない、各語を明確に発音しないと聞き取れない/ 一語一語にこだわってしまい、言っていることの全体を理解できない

3. どのようなストラテジーを使用するか

繰り返し、ジェスチャー、表情、絵、日本語をまじえた説明/ 短い文、単純な構造、意味毎に区切る話し方、節の使用を最小限にする/ ゆっくり、はっきりと発音、Japanese-like pronunciation は使わない/ 生徒の shyness を考慮する、高度な言語項目を要するような話題を避ける

IV. 考察

アンケート結果から、語彙指導、コミュニケーションに役立つ文法の指導、スピードや音の連結に対応する発音指導、態度・関心に関わる問題等について、いくつかの課題を読み取ることができる。発表では、これらの課題について考察する。

Comparison of attractiveness in multiple-choice and dichotomous judgement items

安間 一雄 (玉川大学)

This study is intended to clarify part of the judgement process of choice involved in grammar tests. We focus in particular on two commonly used formats, multiple-choice and dichotomous judgement, and compare the degrees of attractiveness with reference to the test-takers' proficiency levels. We have concluded that what multiple-choice items require is a process of relative judgement of correctness among alternatives rather than absolute grammaticality judgement.

The subjects were first and second year university students in Japan who have learnt English as a foreign language for approximately 6 years. Half of them were asked to answer basic grammar questions in a multiple-choice format. These multiple-choice items were decomposed into dichotomous judgement items and they were presented to the other half of the subjects. For example, where a multiple-choice item is

[MCI]____was not surprising.

A. For the man cried B. So the man cried C. That the man cried D. The man cried

the corresponding dichotomous judgement items are

[DJ1] For the man cried was not surprising. [DJ2]So the man cried was not surprising.

[DJ3] That the man cried was not surprising. [DJ4]The man cried was not surprising.

In other words, where one is asked to choose an option from among the suggested alternatives in a multiple-choice format, one is asked to make a grammaticality judgement for each of the decomposed sentences in a dichotomous judgement format. In order to avoid the proximity effect the decomposed sentences were placed separately among other sets of decomposed sentences.

One of the noticeable results is that the probability of choosing an option in a multiple-choice item does not necessarily show the same pattern as that of the corresponding dichotomous judgement items. In [MCI] the probability of getting the correct option, C, increases dramatically as the test-taker's proficiency level increases. The corresponding sentence, [DJ3], however, shows a flat probability pattern; it remains roughly 50% throughout proficiency levels.

We conclude therefore that different processes of evaluation are activated in the two formats - relative and absolute judgements. A dichotomous judgement sentence which is 50% likely to be correct and 50% incorrect may not be 50%. likely to be chosen in comparison with other alternatives. Practically, we can also say that a multiple-choice format does not provide accurate information about the test-takers' judgement of grammaticality on options.

研究発表（第２室）

「英語聴解カテストにおける項目分析」

土平泰子（信州豊南女子短期大学）

項目分析は言語テストの妥当性を調べるためによく活用され、その分析方法も様々である(e.g.、Scheuneman and Gerritz 1990, Ryan and Bachman 1992)。それぞれ研究目的によって項目分析にも工夫がされているが、適切な項目分類、分析法は必ずしも明らかではなく、特に分類には研究の余地があると考えられる。

本発表では英語の聴解カテストの、特に受験者の同形式のテストに関する過去の受験経験の有無によって生じる問題について焦点を当てた。これに注目した第一の理由は、TOEIC, TOEFL 等の国際的な Proficiency Test においては受験経験の有無がその結果に影響を与えるのではないかと考えたことにある。実際に始めて受験した時よりも 2 回、3 回と受験してスコアが上がったという話も聞く。これは避けられない現象であろうが受験経験の無い者に不利な項目は出来るだけ除外していく必要がある。

第二の理由は受験経験のない日本人受験者を典型的な日本人学習者と見て、言語的、文化的背景から考察を加えることが出来るかもしれないと考えたからである。例えば言語的背景では、SOV language である日本語を母国語とする日本人が英語聴解カテストを受けることによる独特の影響はないのであろうか。また文化面では、日本は単一民族国家であるという一般的な認識とそこから来る日本人の異文化交流に対する考え方が影響を与えることがあるかもしれないと考えたのである。

国際化が叫ばれてから十数年が経ち、海外旅行・留学経験者そして帰国子女の存在も一般化した昨今、受験者の背景もさらに多様化してきている。最終的には listening の能力とは何かという問題とも重なるであろう。これは Buck(1994)が指摘した英語聴解カテストの unidimensionality の問題とも関係があり、そして英語聴解カテストに項目応答理論を用いる妥当性の問題にも繋がる。この重要な問題に十分な回答を与えられるとは思わないが、何らかの示唆を得ることが出来ればと考えている。

「オーラル・コミュニケーション能力を重視したリスニング・テスト問題出題条件がテスト成績に及ぼす影響」

木下正義（福岡女子短期大学）　石井和仁（福岡大学）
大津教史（福岡大学）　川尻徳（宮竹中学校）
島谷 浩（九州共立大学）　髙梨芳郎（福岡教育大学）
Laskowski, Terry（熊本大学）

1. 研究目的

1994 年度から、高等学校の外国語（英語）に「オーラル・コミュニケーション」が導入されたのをきっかけとして「オーラル・コミュニケーション能力の養成と科学的評価の研究」というテーマで研究を開始した。まずリスニング能力とその評価について基礎的、理論的研究を行い、先行研究を整理、検討した。その後、オーラル・コミュニケーション能力を重視したリスニング・テストの開発研究に着手した。1995 年に 2 種類の試行テストを作成し、「オーラル・コミュニケーション B」を受講したことのある福岡、佐賀、山口県の高校生 758 名に実施した。1996 年には、試行テストで得られたデータを基に本テストを作成し、九州全県と沖縄、山口県の高校生 800 名にテストを実施した。

本発表では、試行テストと本テストの問題作成過程で生じた出題条件の変更が、高校生のリスニング・テストの成績にどのように影響を及ぼしたかを、受験者の成績と受験後のアンケート調査で得られたデータを基に検証するもの

である。研究対象となった出題条件の違いとは次の通りである。1）マークシート方式と問題冊子にチェックする解答方式。2）問題文を２回聞く場合と１回限りの場合。3）実際に英語を書く場合と選択肢を選ぶ場合。4）指示や問題文を読む時間の長短。5）問題解答時間の長短。

2.　テストの実施

2.1.　試行テストの実施

実施年月：1995年5～6月

被験者数：758名（男388・女370）

FormA 372名（男179・女193）、FormB 386名（男209・女177）

実施校種別：公立校6校（普通科3・英語科1・実業科2）私立校3校（普通科3）

2.2.　本テストの実施

実施年月：1996年11月

被験者数：800名（男444・女356）

実施校種別：公立校16校（普通科7・英語科3・実業科6）、私立校4校（普通科4）

3.　テストの成績集計結果

	被験者	平均	最高	最低	標準偏差	信頼度係数
試行テストA	372	55.4	97	15	15.93	.694
試行テストB	386	52.6	93	19	16.08	.685
本テスト	800	60.3	100	15	18.37	.782

Does prepping for a standardized test help?

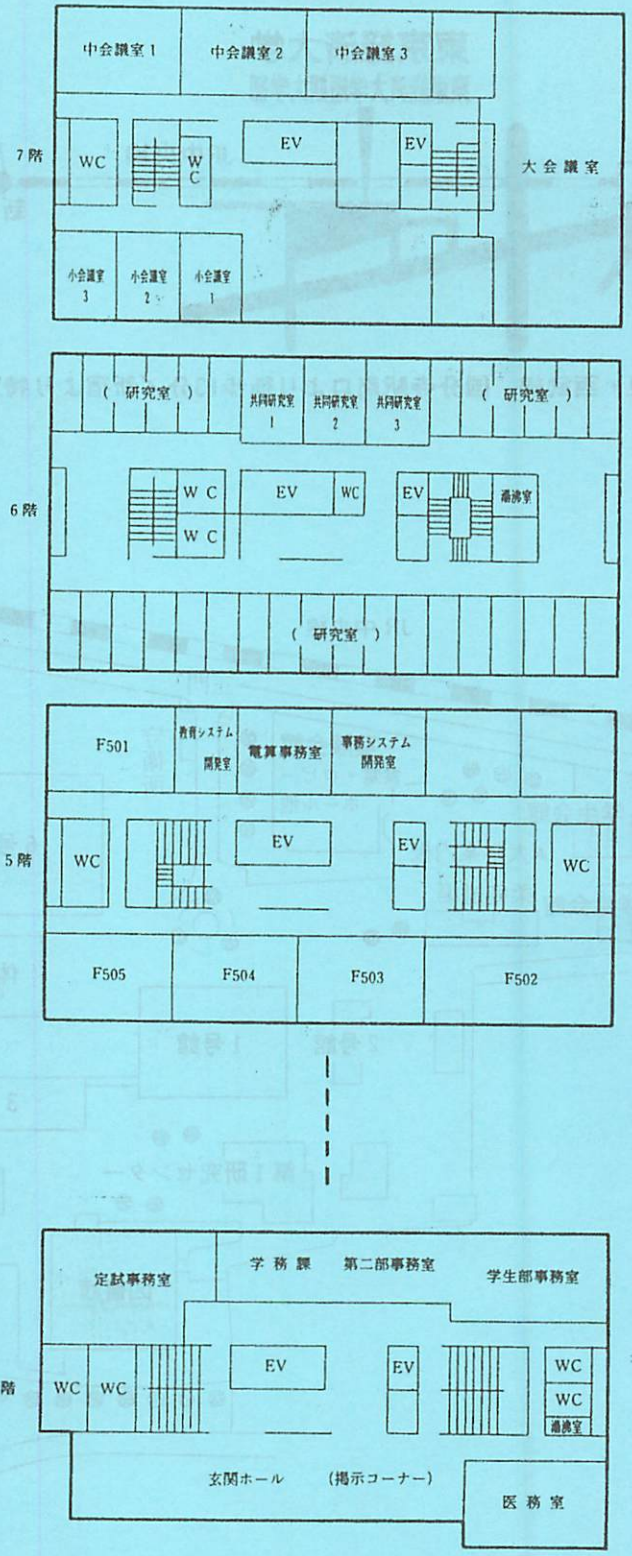
Robb, Thomas（京都産業大学）　Ercanbrack, Jay（京都産業大学）
Ross, Steven（関西学院大学）

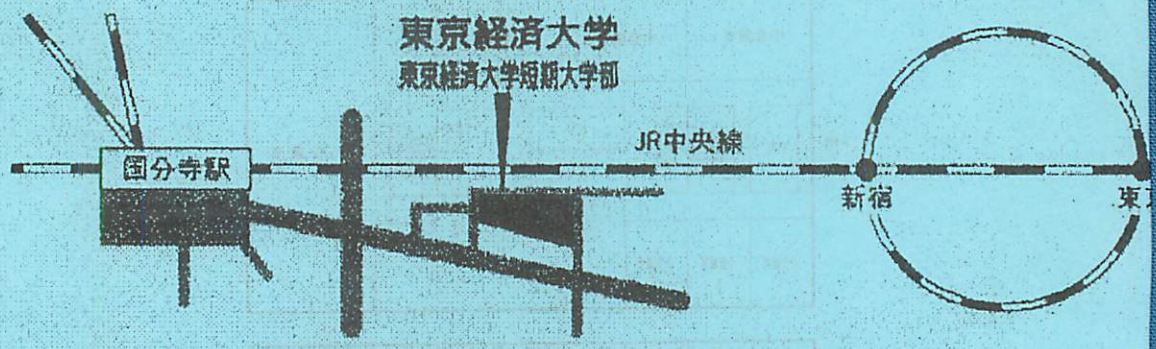
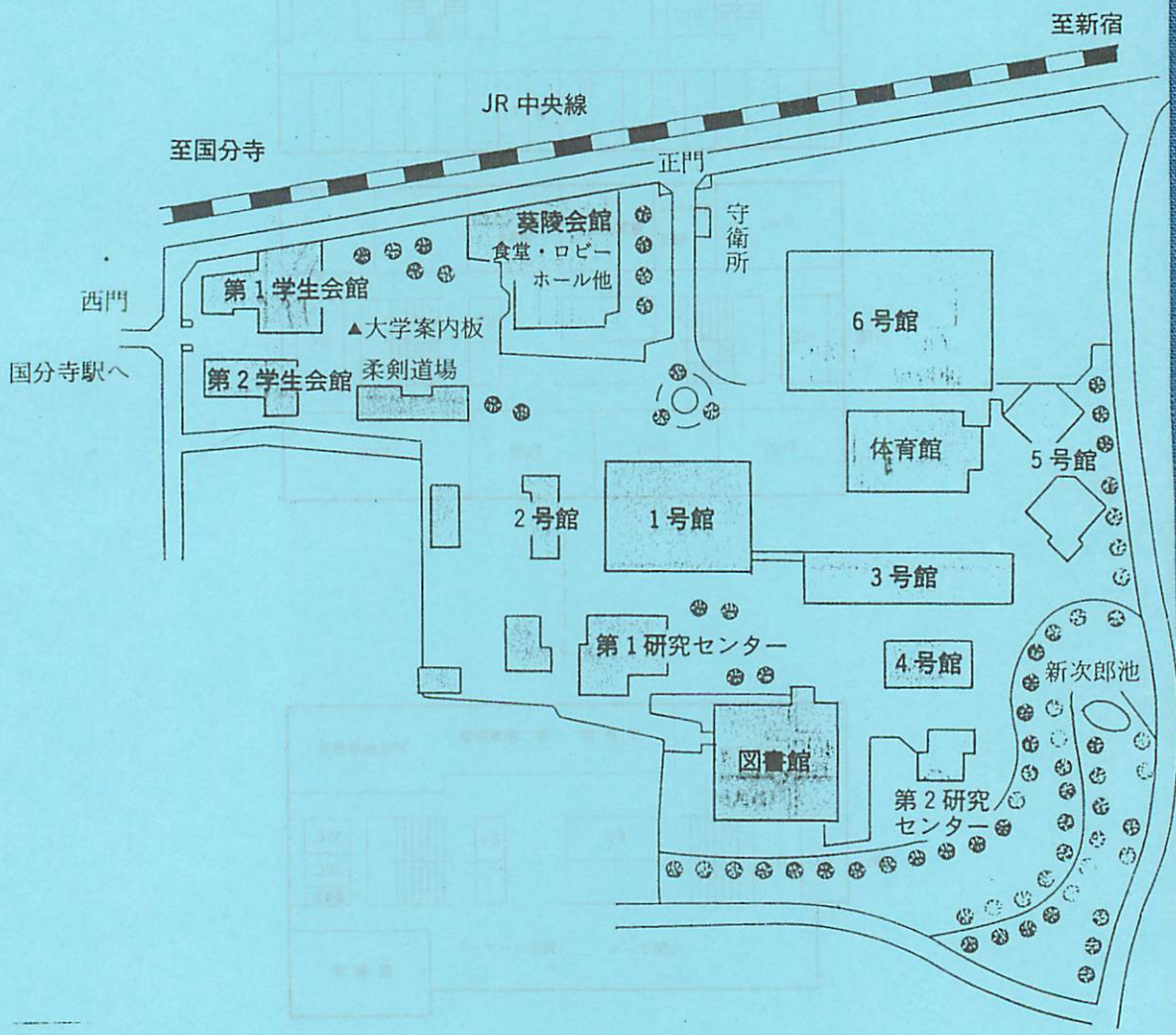
This research was designed to shed light on a long standing question: Is direct study for standardized tests an effective means of preparation, or would the time be better spent studying general English skills?

Some 400 students at Kyoto Sangyo University were divided into three treatments, direct TOEIC preparation, Business English and General English. A total of fourteen sections of students, including 8 sections of freshman English majors, and 6 sections of freshmen majoring in other subject areas participated. The "TOEIC" groups used commercially available TOEIC preparatory material, the "Business" groups, working under the assumption that such materials might be equally effective, used EFL Business English texts, while the "General" groups used standard four-skills materials. All students received brief preparation, including a shortened practice version of the TOEIC, before taking the baseline TOEIC (I/P) examination in early May. The post-test was administered at the end of the course, in January, 1997.

This presentation will start by outlining the existing literature on the effects of direct test preparation and will then proceed to describe the current experiment including the results and implications.

6号館(F)


7階
中会議室1
中会議室2
中会議室3
WC
WC
EV
EV
大会議室
小会議室3
小会議室2
小会議室1
6階
(研究室)
共同研究室1
共同研究室2
共同研究室3
(研究室)
WC
WC
EV
WC
EV
準備室
(研究室)
5階
F501
教育システム開発室
電算事務室
事務システム開発室
WC
EV
EV
WC
F505
F504
F503
F502
1階
定試事務室
学務課
第二部事務室
学生部事務室
WC
WC
EV
EV
WC
WC
準備室
玄関ホール
(掲示コーナー)
医務室



■JR中央線・西武線　国分寺駅南口より徒歩13分／新宿より特別快速で19分